

象徴として「青年」に関する研究 その1

—日本における「青年」像の起源—

清 水 諭

A Study on symbolism of “Seinen”— 1 —

—Origin of the image of “Seinen” in Japan—

Satoshi SHIMIZU

The subject of this paper is to analyze the background of interpretation of ‘Seinen’ in Japanese culture. A brief summary of the history about creation of ‘Seinen’ is as follows :

- 1) The idea of ‘Seinen’ (Young man) derives from modern Europe.
- 2) In Japan, Soho TOKUTOMI focused on ‘Seinen’ to create a citizens who have spirits of freedom against the government of Meiji.
- 3) TOKUTOMI said the ideal of ‘Seinen’ lies in a noble, lively and strong will, as well in a various thoughts and boldness. *Seinen’s* behavior must be solemn of simple manner, and fortitude temper. He must be independent.
- 4) The ideologies of hard work and grave within Japanese culture were combined with the Christian mind.
- 5) Since the word ‘Seinen’ carry a meaning of a class-consciousness, the acts of upper-class in Meiji era imply the influence of ‘Seinen’ on sport or so on.

Key words : symbolism, *Seinen*, soho TOKUTOMI

「新人民ノ品行ハ即チ新日本ノ品行ナリ。明治青年ノ運命ハ明治世界ノ運命ナリ。・・・故ニ吾人ハ望ム。我カ明治ノ青年ニ望ム。試ニ卿等ノ眼孔ヲ社會水平線上ニ擧ヨ。」

徳富蘇峰『新日本之青年』

I. 問題の所在

筆者はこれまで、日本人の意識の中で「固定化」したコノテーションとして、共通の解釈を呼び起こす作用を持つものを神話とし(17)、特に、甲子園野球の神話作用について研究してきた。いくつものメディアに注目され、選手、監督、審判、そして応援団にいたるまで、その技芸や仕事、言

説が、大観衆と多くの視聴者の前で披露され、様々なメタファーとして意味解釈されるひとつの見世物、あるいは文化的パフォーマンスとすることができる甲子園野球は(18)、日常と異なった時・空間と秩序のもとで、我々自らを鏡に映し出し、自らを定義し、様々な代替(オルタナティブ)案を提示する機能を持ち、我々が人生の再構成として理解することのできる神話をシンボリックに伝達している(19)。

その甲子園野球における神話作用のメカニズムについていえば、「純真で」「男らしく」「すべてを正しく、模範的な」「青少年」が「スポーツマンシップ」と「フェアプレイ」の「精神」で「地

方の代表」として「潑刺たる妙技」を見せるものだという神話が、朝日新聞社と、日本高校野球連盟を中核として、歴史的に醸成され(20)、また、テレビによって、「一生懸命さ」「努力」「一体感」「郷土意識」「友情」などの意味解釈をもたらすことが記号論的分析から明らかになっている(21)。そして、地域というコンテクストの地平においても、「さわやかで、のびのびした、高校生らしい池田高校」といった神話が、池田町民のエトスといえるものを背景にして、メディアや寄付金、壮行会といった〈共同体験〉の中で、毎年、再生産されていることがわかっている(22)。甲子園野球は、以上のような「さわやかさ」「純真さ」「一生懸命さ」などの社会的神話を意味解釈させるメカニズムを包含しているため日本人の多くを魅了するということができるのである。

さて、こうした甲子園野球の神話作用についてもう少し深く考えてみようとする時、以下のような問題が出てこよう。すなわち、「さわやかさ」「純真さ」「一生懸命さ」などの解釈の基盤といえる日本文化における「青年」の象徴性についてである。甲子園野球にとどまらず、スポーツにおいて「若さ」は、メタファーとして大きな作用をもたらすが、この基盤ともいえる「青年」像を日本文化の中で探ることが重要なテーマとなる。ここには、明治以来の日本文化における近代に関して分析する糸口が見え、また、武士道の精神や儒教的倫理観と異なった青年論の立場から、日本における近代スポーツの精神的土壌を再考することができよう。

本論文では、今後、継続的に研究していくその序説として、社会学で取り上げられてきた青年論を概観した後、近代西欧そして、日本において「青年」像がどのように創出されてきたのかを考察していく。そのことで、日本文化における「青年」像を探る糸口としたい。

II. 青年論の系譜

そもそも青年期という人生における年齢区分の定義自体が曖昧である。普通その始まりは、生物学的成長すなわち肉体の発育発達の側面から規定されていて、第二性徴がみられる頃とされる(12, 7, 8, 2)。しかしながら、異性との関係が確立し、家庭から解放され、情緒的、社会的に成熟し、経済的にも独立し、そして社会人とし

て人生観と将来に対する計画が確立すること、このことを青年期の課題とすると、心理的、社会的要素が複雑に絡み合い、どの時点で青年期が終了したというべきか非常に困難である。まさに社会的・文化的文脈によって、何をもって青年期の終わりとするか、そしておとなであることの条件は何か、という問いに対する答えは、流動化するのである(1, 6)。こうしたことは、「引き延ばされた青年期」やモラトリアムの問題が生起する現在にあって、なおさら大きな問題となっている。

それぞれの社会構造や文化的コンテクストとの関わりで流動するにせよ、青年とは、生理的に成熟の過程であり、心理学的には依存的な幼児期の延長であると共に、それを終えようとする時期であり、また、社会学的にみれば子どもとおとなの中間にあって、その断層を埋めようと努力する時期である(13)といえよう。

また、依存性と自律性の葛藤に悩み、ある局面ではおとなと同等の役割・行動をとることができるにも関わらず、おとなの地位に移行することをためらっている青年のある年代層をユースと定義し、そのことから、現代に特有なユース的状况を問題視することもなされてきている(14)。ユースは、漠然とした不安を抱きながら、脱因習的、非二元論的な道德判断をもち、既存の社会制度や慣習に批判的な態度を生み出す非連続性を帯びた状況であって、青年期を12歳から24歳くらいまでとするならば、ユースは、その後期の18歳から30歳前後の年代層までを含んでいる(15)。全ての人間が社会へ出る前の猶予期間としてのユース期を経験するわけではなく、依存性を発揮することができるという意味でユースは、現代的選良であり、先進工業国の、労働者階級よりも中流階層に、それも高等教育を受けた青年の方に多いとされている(16)。以下にみられるように青年期が作り出されてきた歴史性をふまえても、青年やユースは、社会的な階層性を抱え込んでいる語といえるだろう。

(1) 西欧近代における青年の創出

子どもとおとなの連続性を切り離し、無責任で、依存性のある青年期及び青年を創出したのは、西欧近代である。近代がどのように青年期を作り出してきたのかについて、栗原は、4期に分けて述べている。まとめてみれば、第1期(18世紀半ば

以前)：児童労働がふつうで、早くから労働力として期待されているため、児童期ということさえ必要悪だった。第2期(18世紀半ば～19世紀半ば)：ルソーが『エミール』(1762)の中で、少年期(12～15歳)と成人期(20歳以上)の間に自立的なものとして青年期を見いだす。そして、ルソーやロックの教育論が普及し、青少年を労働から家庭に取り戻そうとする。特別、上流及び中流のブルジョワ階級の家庭で青年という範疇は市民権を得る。第3期(19世紀半ば～1920年代)：青少年の教育は、家庭から学校に移される。19世紀半ば頃、パブリック・スクールは、地方の青少年をはじめ社会的な劣位者を締め出して、ブルジョワ社会の要請に応えようとする。産業ブルジョワジーの子弟は父親以上のエリートの地位を約束されるようになって、学校は体制の安定と維持のための堡壘へ変身した。このパブリック・スクールにおいて青年だけの典型的な青年期が培養された。この期間、ブルジョワ階級の青年は、社会的責任を免除された特権集団を構成する。第4期(1930年以降現代まで)：経済成長を支える産業の専門化と巨大化は社会的役割のいっそうの専門化と画一化を要求する。この社会的要請に即して、おとなたちは青年に対して、第1に段階的な専門技術、第2に、現システムの空間的安定および時間的連続性を保証する「適応」能力、第3に、拡大再生産と技術革新に資するかぎりでの「自己開発力」を備えさせるために、「実世間の荒い波風」から隔てられ、庇護され、延長され、しかも制度化された青年期を用意した。

栗原は、このように青年期の創出をまとめた上で、「つまり青年期は全体の社会体系の中では、生産の効率を維持するために政治社会、特に企業権力が、公教育や意識産業を媒体に、企図し作り出したものであるといえる。」と述べている(5)。

また、坂田は、18世紀末から19世紀半ばにかけて国民国家の独立と統一を求める政治運動の母体となる青年運動として、青年が組織されたことを「青年期」の起源としている。その点について以下のように述べる。

「産業革命が急速に進行して社会が構造的に変化し、時代の動きに適合せぬ政権が国民の期待に応えられぬ時、青年は社会の矛盾に目を開き、自国の後進性を憂え、理想に燃えてラジカルな行動をとるとともに、その連帯を同じ年齢集団に求め

たのである。『青年』の名を冠する政治運動が、近代化の中で一挙に拡がった理由はそこにある。

(中略)歴史的な意味で青年期が発生したのは、ほぼこの時期にあたる。青年の進歩的性格は、社会の中で年齢集団と結びついたひとつの勢力をつくると同時に、新旧世代の意識・行動のギャップを際立たせ、青年は旧世代に追従する『若い成人』であることを拒否し、『若い』ということに力点を置いて、『成人』との連続性を断ち切り、人生という軸においても、青年期を明確にさせたのである(9)。」

そして、坂田は、19世紀半ば以降の工業化と都市化、社会的分業の促進にともなった状況の中で、貧困・退廃・疎外と理想との矛盾に対するラジカルな政治運動体として青年が注目され、さらに、おもにブルジョワ階級の子弟が、社会的責任を免除された特権集団として、様々な社会集団を形成したことについて以下のように述べている。

「一方・・・、先進ヨーロッパ諸国から、別種の青年運動が起こったことにも注目しなければならない。特にその中心となったのはイギリスで、1844年、青年たちの手によってYMCA(キリスト教青年会)が結成され、61年にYWCA(キリスト教女子青年会)、75年にGFS(少女友愛協会)、83年にボーイズ・ブリゲード(ボーイ・スカウトの前身)、84年に仕官候補生団など、青年の自主的な矯風・連帯・心身の強化・社会活動をおこなう団体が生まれている。またドイツでは、19世紀末から青年の間で徒歩旅行がおこり、それが1901年にワンダーフォーゲルとして組織化され、さらに13年には『青年の、青年による、青年のための運動』として、『自由ドイツ青年運動』がおこっている。

当時産業革命はさらに進展して、工業化・都市化が急速に進むと、貧困・退廃・疎外などの現象が拡がり、青年の中にさまざまなアノミー現象が起こった。この中にあって青年たちは、社会に対して理想主義的な批判を持つと同時に、そうした成人文化の毒素から、青年期を切り離して自らを守ろうとした。またこの運動の担い手は中産階級出身であることから、それなりのエリート意識を持って、社会の悪風に染まった青年労働者や、次代を担う少年を救済し、指導しようとしたのであろう。YMCAなどの運動は、宗教的・道徳的な面から精神的価値の再興をはかり、ワンダー

フォーゲルの運動は、共同体的感情やロマン的志向から青年の自己実現を求めたものである(10)。」この坂田の見解は、詳細についての実証がなされていないが青年期という社会的に猶予された中で、青年たちが社会問題に敏感に対処していく姿勢を持ち、行動したことを表している。

以上のように青年期及び青年は、西欧近代において全体社会の生産力を上昇させることを主眼とした産業化社会の中で、栗原の言うように、公教育や意識産業を媒体に、企業権力が作り出したものといえるが、その彼らの行動として産業化社会の様々な矛盾に対するラジカルな政治運動がみられたことは事実であり、社会的責任を免除された特権的集団として青年たちを特徴づけることができよう。

(2) 日本における「青年」像の起源

日本において青年の語は、「春を春陽といふ、人の一生に於て少年の時は春の如し、故に青年といふ(3)。」という語源を持ち、また、青春は、「①春は東方にして其の色青し、故に春を青春といふ。②人の少なき時は春の如し、故に少年者を青春といふ(4)。」に由来する。

江戸時代以前より、日本では、村落共同体の中で青少年の集団組織として、若者組・若衆組・娘組といわれる制度があり、特有の規律や秩序を持ち、集団生活を営みながら公共的活動を行ったり、婚姻の機会を待つといった機能を有していた。また、江戸時代の武士の子弟たちは、元服から結婚までの間、藩校などの教育機関で学ぶなど社会に出るまでの一定の猶予期間が与えられることが常となっていたことは一般によく知られるところである。

しかしながら、青年を「進歩の朋友」あるいは「時代の先登者」として位置づけ、その意義と使命を強調されるようになったのは明治期のことである。学制の施行による書生・学生といったインテリ・エリート層の拡大、自由民権運動など政治運動への青年の参画、西欧のハイカラな文化の流入などを社会的背景とし、青年が国家において特別な意味を付与され生起してきたと考えられる。

ここでは、日本で青年を初めて論じた徳富蘇峰とその著『新日本之青年』における「青年」像を明らかにすることから、日本における青年の起源を探る一助としたい。青年の語は、1880年に熊本

バンド出身の小崎弘道が、欧米にならってYMCAを創始する際、「ヤングマン」の訳語として当てたのが最初であるともいわれる中で(11)、徳富蘇峰は、若いクリスチャンのバンド仲間のひとりであって、そうしたつながりも含めて「青年」像を創出した文化的背景が明確になると思われる。

① 徳富蘇峰と『新日本之青年』前後の思想

蘇峰(本名猪一郎)は、1863年1月25日、肥後国上益城郡益城町字杉堂村(現、熊本市秋津町)(母方の実家)に、豪農にして葦北郡水俣郷津奈木郷の惣庄屋兼代官をつとめる徳富家の第5子長男として生まれた。(まもなく葦北郡水俣村濱1222番地の徳富家に移った。)母方も惣庄屋兼代官の家柄の上に、父一敬と母方の親戚が横井実学党(明治初期、地祖軽減・公選県民会設立要求運動を行い、熊本における自由民権運動の源流となる)の幹部として幕末から明治10年代にかけ活躍するなど、開明的な郷農一族のもとで育ったといえる(36)。以後、年譜を参考にして略歴を描いてみる。

蘇峰は、幼少より、漢学、洋算など多くの教養を様々な私塾で受けていたが、1875(明治8)年13歳の9月に熊本洋学校に再入学した際、漢文訳の旧・新訳聖書を読み興味を覚えた上、小崎弘道ら上級生の影響で西洋学問やキリスト教への開眼が始まった。そして、翌年、熊本(花岡山)バンド奉教結盟事件に参加し、報国のため、また人民の啓蒙のためにキリスト教を信奉するという奉教趣意書に署名している。このことは、横井実学党すなわち漢学と儒教倫理の世界から抜け出す契機となった。そして、8月、いったん東京英学校に入学するも、10月には両親に無断で同志社英学校に入学、12月3日新島襄より洗礼を受けた。以後、1880(明治13)年5月に退学するまで、同校で新島、デビス、ラーネッドらの教養を受けながら布教活動、論説活動を行う。

卒業後、新聞記者への夢は果たせず1880年11月熊本に帰る。父一敬の教える実学党系の共立学舎でギゾーの文明史、英国憲法史などを講義する傍ら、討論、演説活動を多数行う。後、国権党、実学党に対抗する民権政社で自由党系の相愛社に正式加盟、1882(明治15)年20歳の時に、相愛社と実学党が合体して公議政党を結成した際、その創立委員となった。そして、その年の3月に九州地

方の民権政社が合同して九州改進黨を結成した際、蘇峰は熊本本部委員となった。また、同月、大江村の自宅を塾舎にして、父一敬が漢学、蘇峰が英学、歴史、経済、政治等を教授する大江義塾を開校。その祝文で、蘇峰は「教員ノ干渉」を避け、生徒の自由自治の發揮を期待する旨を述べている。

1884（明治17）年10月自由党解党、12月改進黨も事実上解党、さらに翌年5月、九州改進黨が解党する中で、『第十九世紀日本ノ青年及其教育』を私刊し、論壇の注目を集めた。1886（明治19）年には、「我國民ヲシテ自治ノ精神ヲ發揮セシムルノ策」「政治ヲ改革セント欲セバ先ヅ人ヲ改革セザル可ラズ」を『大江義塾雑誌』に執筆し、『將來之日本』の原稿を携え、土佐に板垣退助を訪問、上京しては、田口卯吉、島田三郎、大隅重信、陸奥宗光、矢野文雄に会っている。9月14日に大江義塾閉鎖後、12月、一家を挙げて熊本を立ち上京する。翌1887年2月15日、民友社を設立、『國民之友』を創刊、表紙に「政治社會經濟及文學之評論」と記した。寄稿者には、田口卯吉、中江兆民、矢野文雄、小崎弘道、植村正久、新島襄、福地桜痴、植木枝盛、島田三郎、尾崎行雄、金森通倫、浮田和民、内村艦三、新渡戸稲造、安部磯雄、片山潜、金子堅太郎、井上哲次郎、梅謙次郎、坪内逍遙、森鷗外、双葉亭四迷、フェノロサら第一流の論客を網羅し、創刊号は7500部、第2号5000部、第10号より1万部に達し、当時としては異例の売行きを示した。蘇峰は『國民之友』を舞台にして貴族的欧化主義と国粹保存主義を批判し、政治的には藩閥政府を批判、責任内閣制の実現を主張した。この年4月に『新日本之青年』が集成社より刊行されている（37）。

後に蘇峰は、日清戦争後の三国干渉・遼東還附が平民主義に決定的な打撃となり、それを契機に以後帝国主義を唱道し、軍備拡張や地租増徴を強調するに至る。そして、皇室中心主義を旗印として、体制派言論人の中心的存在になっていく。このことは、満州事変以後の戦争の期間にあっても、白色人種の横暴に対する「興亜の大義」を説いて、戦争の正当化をはかり、さらに大日本言論報国会会長に就任して政府に協力しながら、皇室中心主義による挙国一致を唱える行動につながっていくのである。『新日本之青年』に至る蘇峰の思想は、その生涯の中では特異なものと考えられるが、日

本において初めて青年を論じたその背景を以下に追っていくこととする。

それでは、『新日本の青年』に至るまでの蘇峰の思想について『官民調和論』（刊期不明）『明治廿三年後ノ政治家ノ資格ヲ論ス』（1884）及び『自由、道徳、及儒教主義』（1884）から論じてみよう。まず第一に、人民こそが国家の基礎であり、国家はその派生物であるという観念を持っていたことである。「夫レ政府ト人民トハ決シテ二物ニアサルナリ政府ハ末ナリ人民ハ本ナリ人民ハ政府ヲ生シタルモノナリ政府ハ人民ヨリ生セ被レタルモノナリ人民ハ基礎ノ如ク政府ハ家屋ノ如シ既ニ家屋ナリ然ラハ如何ナル家屋ニテモ基礎ヲ毀チテ建立シ得可キモノ〔ハ〕アラス既ニ政府ナリ然ラハ如何ナル政府ニテモ民意ニ反シテ存立シ得可キモノハアラシ（23）」と『官民調和論』で述べているように当時「平民主義」を唱えていた蘇峰にとって、民権派と同様、人民をまず第一にして国家を考えるべきことを論じている。

そして、人民の自由の権利に対して明治政府を専制政府として攻撃するに至る。「夫レ今日ノ事ハ政党ノ争鬪ニアサルナリ官民ノ乖離ナリ則チ日本人民ト日本政府トノ争鬪ナリ一時ノ政略ニ関スルノ議論ニハアラサルナリ即チ政治ノ主義ニ関シ即チ政權ヲシテ人民ニ割興スルト否トノ議論ナリ吾人ハ卑屈ノ平和ニ坐センヨリモ寧口自由ノ危キニ立ン事ヲ欲スルナリ故ニ籠絡ノ調和ニ馮ランヨリ寧口調和ナキヲ以テ希望トスナリ（24）」という言説からは、専制政府に媚びて平和を取り繕い、自由が危険にさらされるならば、官民が調和しないことを希望していることがわかる。

さらに、蘇峰は人民が精神を身につければ日本が対外的に独立の気風を獲得し、そのまま愛国の精神を持つにいたるとするナショナリズムの意識を持っていた（25）。

しかしながら、人民を第一に考え、専制政府に対抗し、自由を得ることによって独立、愛国の精神を得るにいたるという主張を持った蘇峰の民権思想も徐々に壁にあたる。それについて、『明治廿三年後ノ政治家ノ資格ヲ論ス』で以下のように述べている。すなわち、「彼ノ専制者ノ压制ハ随分目覚シキモノナリソレ唯目覚シキカ故ニ随分之ヲ避ルノ術モアルナリ然レトモ彼ノ隣人ノ愚妄迷溺偏僻ヨリ來ル压制ニ到リテハ何ノ地ニカ之ヲ避ンヤ善良ナル人民ノ上ニアル悪害ナル政治ハ其政

府ヲ改革スレハ直ニ自由ノ世界トナル可シ卑屈偏僻ナル人民ノ上ニアル専制ノ政府ハ縦令之ヲ改革シタリトテ直ニ自由ノ世界トナル事ハ夢ニタモナキ事ナリ(26)」とし、人民が「卑屈、偏僻」になっていけばいくらその上の専制政府を改革しても自由の世の中になるはずがないと論じている。したがって、蘇峰は政府の専制と抑圧そして人民の卑屈、偏僻の相互関連の上で、人民の思想改革、自由思想の確立を第一に主張したといえる。

さらに、『自由、道徳、及儒教主義』では、日本人が自由を得ていないのは、復古主義的な儒教の影響によるもので、専制的な反平等主義的なその理論が明治の人民から自由を放擲させたとする(27)。そして、日本が文明開化して独立発展し、国を富ませ、人民の愛国心を高め、思想(文学)や芸術、技芸を進歩させる自由の精神を生む道徳を基礎づけようとするのである(28)。「自由モ道徳ニヨリ真正ノ自由タルヲ得可シトノ言ニシテ千言万語要スルニ唯維新來改進黨の運を中止することなく速かに我邦を一変して純乎たる自由の邦となさんと欲するの一点に帰する也(原文のまま)(29)」の言説は、まさにそのことを表している。

②『新日本之青年』における「青年」像

以上のように蘇峰は、専制政府に対抗し、真に自由思想を確立し、独立・愛国の精神を持った日本人こそが必要だと考えた。そして、そのために儒教でない道徳を基礎づける必要があると説いたのである。さらに重要なのは、こうした思想を身につけ、今後の日本を支えていくのは、今までのように「愚妄、卑屈、偏僻」な人民ではなく、青年であるとする点である。『新日本之青年』では青年に対する期待が随所に示されている。

「誠実重厚ナル純白ノ平民社會ニ進マサル可ラス。而シテ先ツ此ノ方針ニ向テ脚ヲ擧ルモノハ誰ソヤ。吾人ハ之ヲ断言ス。明治ノ青年即チ是レナリト。ソレ青年ハ社會運動ノ旗頭ニ立ツモノナリ。・・・若シ社會ノ年齢ハ。其ノ文明ノ邊ニ向テ回轉スル毎ニ増加スルモノトセハ。我カ明治ノ青年ハ。却テ天保ノ老翁ヨリモ先進ト云ワサル可ラス。故ニ明治ノ青年ハ天保ノ老人ヨリ導カル、モノニアラスシテ。天保ノ老人ヲ導クモノナリ。豈ニ唯タ彼ノ老人ノミナランヤ。我カ明治ノ社會モ亦タソノ指麾中に存スルモノナリ(30)。」

一世代前の天保の人々でなく、青年たちに平民社会の旗頭に立って活躍せよというのである。さ

らに次のように続けている。

「新人民ノ品行ハ即チ新日本ノ品行ナリ。明治青年ノ運命ハ明治世界ノ運命ナリ。・・・故ニ吾人ハ望ム。我カ明治ノ青年ニ望ム。試ニ卿等ノ眼孔ヲ社會水平線上ニ學ヨ。・・・而シテ吾人は再ヒ明治ノ青年ニ望ム其ノ事業ヲ學ハスシテ其ノ心術ヲ學ヘヨ。物質的ノ現象ヲ見スシテ精神的ノ現象ヲ見ヨ。ソレ泰西外形ノ文明ハ或ハ金ヲ以テ之ヲ購フ可シ。然レトモ其ノ内部ノ文明ニ到リテハ。涙ヲ以テ之ヲ購ハサル可ラス。嗟呼旧日本ハ死セリ。而シテ今ヤ新日本ハ既ニ更生セントス。此ノ新日本ヲシテ天ニ聳ヘ。地ニ蟠リ。恆ニ上帝ノ恩寵ニ欲セシメ。赫々タル光榮ヲ四海ニ發射セシメント欲セハ。唯タ須ラク此ノ新人民ヲシテ。其ノ積誠ノ熱火ヲ以テ。此ノ新國向テ。此レカ洗禮ヲ施サシメサル可ラス(31)。」

ここからは、明治世界の運命を担う明治青年が、物質的文明でなくその内部の精神的文明に注目しなければならないこと、その「積誠ノ熱火」をもって新国を打ち建てなければならないと述べているのである。

それでは、蘇峰は、どのような精神主義を唱え、いかなる「青年」像を構築したのであろうか。クリスチャンである蘇峰は、理想の青年像を清教徒になぞらえ、まず以下のように述べている。

「而シテ其ノ清教徒ノ時代ニ於テハ其ノ舉動粗硬。其ノ風采撲質。其ノ志堅確。其ノ行。嚴肅ナル青年ヲ生シ。而シテ僅ニ一世紀ノ四分半ヲ過サスシテ。王政恢復ノ時代ニ於テハ。其ノ大人タルモノハ固ヨリ其青年ニ到ル迄。其ノ風采。舉動ハ都雅嫺麗。其志行ハ浮躁淺狹ナル輕薄児タラザルモノ幾ント稀ナルモノヲ生スルニ到レリ(32)。」としている。さらに、具体的に、青年を「意志高尚ニシテ闊遠。思想博大ニシテ自由。行為活潑ニシテ大膽。而シテ其品行ノ端嚴氣象ノ剛毅ニシテ眞理ヲ愛シ眞理ニ事ヘ眞理ヲ樂ムノ点ニ到テハ。自カラ東洋ノ清教徒ヲ以テ任シ。其時勢ノ臼窠ヲ躍超スル恰モ錐尖ノ囊裡ヨリ穎脱スルカ如ク。一粒ノ栢種カ陽氣ノ恩澤ニ欲シ亭々トシテ荆棘灌木ノ叢林ヲ圧シテ天ヲ衝クカ如ク。猛鶴ノ健翼鋭眼太陽ヲ睨シテ一怒一搏雲表ニ激沖スルカ如ク。獨リ自カラ樹立スル所アラシメハ。焉ゾ智識世界ノ一変セザルヲ憂シヤ。諸君ニシテ自カラ運動セバ時勢ハ固ヨリ運動ス矣。故ニ曰ク渠輩ハ革命ノ客也。諸君ハ革命ノ主人也。止ムハ我カ止ム也。行

クハ我カ行ク也。進ハ我カ進ム也。諸君ニシテ果シテ自カラ樹立スルノ青年ナラシメハ。焉ソ此ノ大責任大義務ヲ辞スル事ヲ得ンヤ (33)。』と述べる。

そして、それをなさしめる社会の精神として、「平民社会ノ法律ハ唯タ因果応報ノ法律アルノミ。一毫ノ請托モナク。一片ノ仮借モナク。人各其ノ種子ヲ下シタル分量ニ応シテ。其ノ収穫ヲ得ルノミ。苟モ遊惰放逸ナレハ。招カサルモ災害ハ來ル可ク。苟モ勤勉力作セハ。迎ヘサルモ幸福ハ自カラ入ル可シ。人一タヒ此ノ公平正大ナル法律ノ下ニ統制セラル、ヲ覚知ス。又タ曷ソソ。其ノ人物ノ莊重謹嚴ニシテ。其ノ一舉手一投足ト雖トモクロンウェルカ所謂良心ヲ手腕ニ運用スルカ如キノ舉動アルヲソレ疑ハンヤ (34)。』と述べ、勤勉に努力すれば必ず報われ、遊び呆ければ得るものはなく、災いがもたらされるとする。

もともと、日本には儒教による勤勉主義、まじめ主義といったものがあつたが、そうした伝統的モラルを基礎としてキリスト教を受容し、キリスト教によって一定の精錬を施すことを通じて青年像が成立したと見ていいのではないだろうか (35)。

以上まとめてみると、日本の勤勉主義、まじめ主義の伝統的モラルの上に、キリスト教を受容し、その精神を基盤にしながら、自由思想を獲得すべき理想の青年像を、蘇峰は以下のように考えていたということができよう。すなわち、意志高尚にして闊達。しかも堅固。思想博大にして自由。行為活発にして大胆。しかしながら品行は厳肅で、風采も木訥。気性は剛毅。そして真理を愛し、真理に応え、真理を楽しむ。これを自ら突き進んで獲得し、自立する者。これこそが理想の「青年」像とされたのであつた。

Ⅲ. まとめ

本論文の目的は、日本文化における象徴としての「青年」像をさぐる糸口として、近代西欧及び日本における「青年」の起源について考察することである。いかなる「青年」像が、当時の人々にイメージされていたのかは、残された課題とするが、ここまでをまとめると以下ようになる。

1) 青年期及び青年の語は、西欧においては、18世紀後半から19世紀半ばに至るまでの時期に、産業革命以後の経済優先の社会の中で、構造的な変

化からくる貧困・退廃・疎外と現実との矛盾に対するラジカルな政治運動としての活動を含め、主に、ブルジョワ階級の子弟が社会的責任を免除された特権集団として、様々な社会集団を構成したことから創出されたといえる。その意味で青年の語は、社会的階級性を抱え込んでいる語であつて、青年期や青年に対する独特の意味を付与できるのは、社会の限られた人々であつた。

2) 日本における青年は、そのひとつとして徳富蘇峰が明治専制政府に対抗し、愚妄、卑屈、偏僻な人民を自由で、独立・愛国の精神を持つように思想改革を行おうとする際、青年に非常に大きな期待をしたことを背景に生まれた。

3) その「青年」の理想像として、意志高尚にして闊達。しかも堅固。思想博大にして自由。行為活発にして大胆。しかしながら品行は厳肅で、風采木訥。気性は剛毅。そして、真理を愛し、真理に応え、真理を楽しむ。これを自ら突き進んで獲得し、自立する者。と蘇峰は考えた。

4) その思想の基盤はキリスト教であつて、日本の儒教的伝統の上に、クリスチャンとしての勤勉主義、まじめ主義のエトスが重なりあつたのではないかと考えられる。

本稿は、日本における「青年」像についての研究の序説としての位置を占めるものである。蘇峰の民友社における人的ネットワークを探ることから、日本における「青年」像の起源を分析し、そのような明治の精神的考察から日本の近代スポーツの持つ象徴的意味としての「青年」について論じることは、今後の課題とする。

【引用文献】

- 1) Eisenstadt, S. N. ; Archetypal Patterns of Youth (1963) , in Erikson. E. H. (ed.) , Youth : Change and Challenge, Basic Books, pp. 24-42.
- 2) Farnham. M. F. (1951) ; The Adolescent, Collier Books, p. 15.
- 3) 池田四郎次郎 (1911) ; 故事熟語大辞典, 宝文館, p. 837.
- 4) 同上書 ; p. 837.
- 5) 栗原彬 (1981) ; やさしさのゆくえ=現代青年論, 筑摩書房, pp. 18-22.
- 6) Mead. M. (1928) ; Coming of Age in Samoa : A Psychological study of primitive youth for

- western civilization, William Morrow and Co., 1973.
- 7) Muuss. R. E.,岡路市郎監訳(1976);青年期の理論 その系譜と展望, 川島書店, pp. 2-3.
 - 8) 坂田一, 林保ら(1967);青年期の理解—人格形成の心理学—, 福村出版, P. 3.
 - 9) 坂田稔(1979);ユースカルチャア史 若者文化と若者意識, 勁草書房, pp.4-5.
 - 10) 同上書, p. 6.
 - 11) 同上書, p. 45.
 - 12) 柴野昌山(1981);現代の青年, 第1法規, p. 5.
 - 13) 同上書, pp. 15-16.
 - 14) 同上書, p. 15.
 - 15) 同上書, pp. 10-12.
 - 16) 同上書, p. 12.
 - 17) 清水論(1991);甲子園野球の神話作用に関する研究, 教育学博士論文, 筑波大学, p. 24.
 - 18) 清水論;同上書, p. 24.
 - 19) 清水論;同上書, pp. 23-24.
 - 20) 清水論(1989);甲子園の神話学, へるめす, 岩波書店, 第22号, pp. 25-26.
 - 21) 清水論(1987);スポーツの神話作用に関する研究—全国高校野球選手権大会テレビ中継におけるテレビの神話作用について—, 体育・スポーツ社会学研究, 第6号, pp. 215-232.
 - 22) 清水論(1989);甲子園野球の神話分析—記号学からテキスト分析へ—<池田町 '88夏>, 体育・スポーツ社会学研究, 第8号, pp. 27-49.
 - 23) 徳富蘇峰;官民調和論, 徳富蘇峰集, 筑摩書房, 1974, p. 13.
 - 24) 同上書, p. 18.
 - 25) 同上書, p. 5.
 - 26) 徳富蘇峰(1884);明治廿三年後ノ政治家ノ資格ヲ論ス, 徳富蘇峰集, 筑摩書房, 1974, p. 28.
 - 27) 徳富蘇峰(1884);自由・道徳・及儒教主義, 徳富蘇峰集, 筑摩書房, 1974, pp. 41-42.
 - 28) 同上書, pp. 48-49.
 - 29) 同上書, p. 49.
 - 30) 徳富蘇峰(1887);新日本之青年, 徳富蘇峰集, 筑摩書房, 1974, pp. 118.
 - 31) 同上書, p. 122.
 - 32) 同上書, p. 123.
 - 33) 同上書, p. 151.
 - 34) 同上書, p. 119.
 - 35) 植手通有(1974);解題, 徳富蘇峰集, 筑摩書房, 1974, p. 373.
 - 36) 和田守(1974);年譜, 徳富蘇峰, 徳富蘇峰集, 筑摩書房, 1974, p. 407.
 - 37) 同上書, pp. 408-412.